

勝林寺寺報

父母交替

昭和七年(1932年)に父が死に、なか二年おいて幼稚園児の弟と母とが世を去った。祖母と姉・妹、そして眼疾療養中の私とが残された。もちろん「寺」なのでご門徒へのつとめが停滞してしまったことでもある。

それに亡き母の代から「庫裡」(寺族の住居)の建て替え事業が進行中である。次期の住職、つまり次の父母なる人が当然要請された。しかしそれは極ごく自然に運ばれた。父の弟夫婦が、福知山で寺の住職として養子に入っていた。しかも眼病の私をここ二年預かって養育してくれていた。

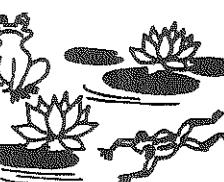
九世の住職・坊守となつて出石に帰つて來た。(丁度療養中の私も退院することになつた)私は以前からの行きがかりもあって、なんのわだかまりもなく「ちちはは」になじめたが、おんなの姉妹は馴染めないものを長く残したようでもあつた。

当時の勝林寺堂宇は、明治三十年前後ころに「坪口」から転居してきた當時のままであった。本堂こそ新築であつたが庫裡は幕藩時代の豪商の住宅かなにかを少し手入れして入っていた。だから本堂が建つまでの名残だろう、家の中央は二階まで大きく突き抜けていた。そこには長くご本尊を收める「空殿」が設けられていたのだろう。しかしどにかく大きな間取りの二階建の馬鹿でつかい古屋であつた。庫裡のたたずまいも大きかつたが、暮らしている人も多かつた。

祖母・父母・きょうだい、六人の外にもいろいろの人々が暮らしていた。務としてご門徒のつとめをしてくれる人。わたしの教育係でも合つた。みな青年僧侶で

あって、だからお勉強だけでなく遊び・大正琴、畠仕事など諸般にわたくつて験けてくれた。阿弥陀さまのお姿が極彩色で印刷された表紙の部厚な本をもつていてご法義(おみのり)の歌をわたしがこの人から伝授された。これが私の「如来さま」との最初の出会いであつたのかも知れない。

金子みすゞの童謡



一寸法師おはなしのうたの三

一寸法師でなくなつた
一寸法師のお公卿さま
お馬に乗つて、行列で
うまれ故郷へおかえりだ。

父さん母さん、にこにこと
一寸法師のおむかえに、
ちいさなお駕籠を仕立てましょ
駕籠かきやすばやい野ねずみだ。

一寸法師おはなしのうたの五

少佐のわやど
おはなしのうたの五
雀のお宿に春がきて
お屋根の草も伸びました。

舌を切られた子雀は、
ものの言えない子雀は、
たもと重ねて、うつむいて、
ほろりほろりと泣いてます。

父さん雀はかわいそで、
お花見振り袖買いました。
母さん雀もかわいそで、
お花見お団子こさえます。
それでも、やっぱり子雀は
ほろりほろりと泣いてます。

ギヨメイギヨジが一番

「役僧」とも「伴僧」などともいつて、住職のかわりに寺の仕事を手伝ってくれる人。そんな人が私の子どもの時分、どの寺にも、また村の「道場」などにもいたようです。勝林寺にも代わる代わるいつもいたその役僧から私はいろんなことを教えてもらいました。

その一つ。
なんでもギメイギヨジまでやらんと駄目。
ギメイギヨジんところが一番肝心なんや。
「ギヨメイギヨジ」って何か。なんにも分かりませんでした。ただ言つてることはその雰囲気からして「最後の最後のところに焦点がある」と言う意味。ギヨメイギヨジとは当時「天長節」などのとき、校長先生が仰々しく読まれた例の「教育勅語」の最後のギヨメイギヨジ。あれは天皇の名前と「ハンコ」(御名御璽)。そこで勅語は終わつた。「ヤレヤレ終わった」と言うところ。

おつとめでも、「ああおわりだ!」「やれやれおしまい!」と粗末にしてはいけない。むしろその終わりのところが大事。親鸞さまの歌『正信偈』の朗唱を習つていた時のことだったからそこから察すると、正信偈一二〇句の最終四句。結歎とも結勵ノ文とも呼ばれているあの部分

弘教大士宗師(七高僧達れぞ)
拯濟無邊極濁惡(哉のを數えずくまき)
道俗時衆共同心(世のをひよみなとも)
唯可信斯高僧説(このみことせ傳ぐ)
それとも『正信偈和讀』を全部唱え終わつて最後に唱える「回向句」といわれる部分願以此功德(ぼくのをまきひき)平等施一切(まな僧をめぐれ)同發菩提心(よきいがにこゝ身にうねば)往生安樂國(きのゆききだらん)

三 日 (金) 出石組親鸞聖人七五〇回
四 日 (土) 本覺寺 永代經法要
五 日 (日) 勝林寺 研修旅行 長良川温泉
六 日 (月) 玉井輝彦宅 三回忌
一 二 日 (日) 中山隆雄宅 一七回忌
二 二 日 (日) 数森一郎宅 一三回忌
四 日 (土) 勝林寺 納骨研修旅行



先日わたしは勝林寺の門徒四五名と同道して「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」に京都西本願寺にお詣りした。この法要のスロー カンは『安穩』

どうもそれだけでは「のんびりと平和な」間延びしたたるんだ雰囲氣で、わたしはいまなかで疑問をさえ持つてた。しかしこの言葉の出所(『親鸞聖人御消息集』)を考えみた。

ときあたかも「東日本大震災」のまつただなか。丁度同じ状況の中で書かれたこの『ご消息』(おてがみ)に最晩年の親鸞の「叫び」といつていいほどの「ねがい」が聞こえて参りました。

ほんとうにわたし、親鸞さまのギヨメイギヨジまでたどり着いた気がいたしました。

一九日 (日)	勝林寺	研修旅行	長良川温泉
二〇日 (月)	西方寺	永代經法要	神戸別院
二五日 (土)	衣川忠良宅	七回忌	福成寺
二六日 (日)	宮嶋幸広宅	三回忌	永代經法要
二六日 (日)	みのりを開く会	七時半より	出石・但東仏教会総会
三十日 (木)	出石	・但東仏教会総会	

共に同心に



「共に同心に」というこころは、親鸞さまが一生のギヨメイギヨジ、結論です。なぜかと言うと、これは親鸞さまが一生かけて撰述なさった法然上人直伝の仏教の真実義をまとめた『顕淨土真実教行証文類』(ご本典)六巻のなかの『正信念仏偈』(正信偈)という百二十句の偈文(うた)の最後の四句です。

『正信偈』は、お釈迦さま以来伝えられた七人の高僧のお徳とその教義を讀えるうたです。その上で、そのおしえを聞いたうえの親鸞様自身の感動と願望を披瀝されたのがこの最終四句の部分です。だから「結歎の文」と言われています。

「弘教の大士、宗士等」とは眞実のおしえを弘め伝えて下さったお釈迦さま以来印度・中国・日本の七人の高僧たちの教えの眼目は。「無辺の極濁惡」、尽きぬ極濁惡のなかに生きる者をこそ救いとらねばとの誓願に報いて今も働いてくださる無碍のひかりの如来様。その如来様の救いの呼び声のなかにあるわたしたち。だから「道俗時衆共に同心に」。出家であろうが俗人であろうが、この末法の時代を生きるものだれもが同じところで。「唯だ斯の高僧の教説を信ずべし」。お釈迦様・高僧がたによって選択されたこの念佛の教えを、唯だひたすらに信じおすがりしようではありますか。(この回向句と呼ばれている句は、もと中国の墨鸞というかたの『觀經玄義分』の冒頭に掲げる『帰三宝偈』の結語)です。

対立・差別・競争・殺戮相剋を超えて「みんなの子」の「いのちの原点」である「念佛」にかえつて「平和安穏」の世界に還えろではないか。念佛弾圧の禁令を出した朝廷も、そのなかで苦しむ大多数の国民も、お念佛のもと、道俗時衆共同心に唯ひたすらお念佛のなかでこれが淨土真宗のギヨメイギヨジ。終局の願いではないか。

親鸞さまの大遠忌に参詣した私の感慨。

性信へのご消息



願はくは此の功德(お念佛の貴いはたらき)をもつて平等に一切の(衆生)に施し同じく菩提心(平等にさとろうという願い)を起こして安樂淨土(安穏な世界)に往き生まれようではないか

老齢で労力奉仕は不可能。財政援助にも限界がある私だけれども、なんとかこの「共、同心に」のこころで被災した方と向き合いたい。あらためてこの「回向句」にも、法要のときの「門主さまの」法話にも学ばせて頂きました。

「性信」という人物は、親鸞にとつては一番古いお弟子。越後からずっと親鸞一家にしたがって関東に入り、後、下総(しもふさ)横須賀の報恩寺を開きあまたある念佛教団の中心となり親鸞念佛の正統を継いだ人物。この京都からのお手紙は、鎌倉幕府における「念佛禁止を訴えた訴訟」事件にひとり献身的にかかわって、一応の解決にまでこぎつけた性信の勞を労つたものです。

親鸞が関東を離れ京都に帰ったのは文暦元年(二三四〇年)。このころ京都の世相は「末法濁世」そのもの。全国的な飢餓のなかで都に流入してきた難民に流行病が蔓延し市街地には人の死骸があふれその上、京都大震災。盜賊・人さらいなど犯罪が日常的。またしばしば火災まで起こつて親鸞さまも何度か焼け出されるそんな惨憺たる世相でした。そのうえ源平合戦、院政、例の「承久の変」で念佛弾圧の首謀者であつた三上皇が島に流され、各地の守護・地頭のあいだでも合戦が続く。

その京都に住む親鸞の元へ関東からもたらさ

れるのは、関東各地に在地権力者と結託した念佛集団相互の確執・非難合戦でした。なかでも親鸞の長子「善鸞」の巻き起こした相互弾劾旋風。ことにわが子のおこした混乱だけに老いた親鸞にはことのほかの衝撃であつたでしょう。

「親鸞あなたは、他人のわたしたちにいかげんなことを説いたのではなかったの」鎌倉でも同様の訴えが起こされていました。

朝廷が念佛を禁止したことがもとで世間に違法がおこなわれ、「承元の乱」や「承久の変」のような混亂がおこつたことですから、それについても「世の安穏」(やすらかな社会)ということに心をいれてお念佛を申しあわせたいと念ずることあります。詮ずるところ、念佛申す人は、ご自分の往生のためとお考えにならなくとも、ねんぶつを彈圧した朝廷。また飢餓疫病にくるしむ国民のために、念佛も申し合いますなら、こんなに喜ばしいことはありません。淨土往生に不安なお方は、自分にとつて淨土往生とはと考えてお念佛なさいませ(お念佛にお問い合わせ)。わたしの往生はすでに決定しているのだと信心決定(しげじょう)しているお方は、如來さまのお慈悲のご恩をもつたいく思うつけ、ますますお念佛を一筋に称え「どうぞ世のなかやすらかでありますよう(世のなか安穏なれ)」そのためには仏法が正しくひろまりますようにと念じていたいだきた」と考えるのです。どうぞよくよくご思案下さい。ほかの思案は一切無用。

